

女子大國文

第百五十一号

平成二十四年九月発行

女子大國文 第百五十一号

平成二十四年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十一号

平成二十四年九月十五日 印刷
平成二十四年九月三十日 発行

〒605-8583 京都市東山区今熊野北日吉町五番地
編輯兼
発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一九〇七六
FAX 〇七五-五三一九一三〇
振替 〇〇〇〇-五三一三一四

〒606-8404 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四一四一〇八代
FAX 〇七五-四三三六二八二

源順と紀齊名の詩序表現について……………山本 真由子(一)

——具平親王詩宴の「望月遠情多詩序」を中心に——

京都女子大学図書館蔵

施諸餓鬼飲食及水法平安後期点……………西崎 亨(二五)

『古今和歌六帖』出典未詳歌注積稿……………福田 智子(四〇)

——第六帖(8) 尊くことなし草——

資料紹介・東京美術学校日本画科卒業制作「外科手術」 泉 由美(七七)

——鏡花作品受容の一側面——

彙報……………(八九)

京都女子大学国文学会

彙報

二〇二二年度国文学会行事（前期）

○優秀論文発表会

五月二日（土）午後一時より

卒業論文

堀邊絵梨子氏

『栄花物語』月の宴巻 村上天皇と按察の御息所の対話

場面卑見―保子内親王への琴の伝授をめぐって―

定松良子氏

「泣いた赤おに」における廣介童話の善意

山口望氏

語研究におけるコーパスの利用

修士論文

山中亜紗子氏

平安時代後期における「十三夜の月」

発表会終了後、国文学会研究室にて、発表者の方々を囲んで

の茶話会も催しました。学部生にとって有益な会となったこ

とと思います。参加学生の作文を後に掲載しておりますので、

あわせて御覧ください。

○本年一月、名誉教授の福永静哉先生が亡くなられました。謹ん

で冥福をお祈り申し上げます。在りし日の福永先生を偲ぶ

文章を、名誉教授清水克彦先生がお寄せくださいました。

○昨年度一年間、京都府立大学に内地留学されていた江富範子先生が戻られました。

○本年度の国文学科主任兼国文学会代表幹事は山崎ゆみ先生で

す。運営委員は川島朋子先生、工藤哲夫先生です。大学院文

学研究科国文専攻委員は西崎亨先生がおつとめです。

○本年度の『女子大國文』編集委員は江富範子、峯村至津子が務

めさせていただきます。

○公開講座

五月一八日（金）午後四時三〇分より 於J20教室

講題 川端康成の「魔界」とは何か

講師

奈良女子大学名誉教授
神戸女子大学名誉教授

濱川勝彦氏

かつて本学教授でいらつしやいました濱川勝彦先生をお招きしました。本学で先生の御指導を受けられた卒業生の皆様にも多数ご参加いただきました。

○新入生歓迎行事 能楽鑑賞会

六月九日（土）午後一時より 於音楽棟演奏ホール

能装束の着付けや能楽の囃子についての解説拝聴

半能「橋弁慶」鑑賞

観世流能楽師味方團先生ほか、シテ方、囃子方の諸先生方に御世話になりました。後に掲載しております新入生の感想文もあわせて御覧ください。

福永さんの一面

名誉教授 清水克彦

福永さんは、今年の一月三十一日、御仏のもとへ旅立った。

福永さんと私は、終戦後すぐの頃、相前後して京都女子大学に職を奉じ、定年退職の後も、しばしば電話で連絡をとり合うという、極めて長期にわたつての、親しい間柄であった。従つて、彼についての思い出は数多いが、ここには、彼の人の或る一面を表わす、二つのエピソードを記し留めておきたいと思う。

昭和五十年代の後半に、かつては同僚であり、当時は龍谷大学に転じていた中川浩文さんが急逝した。その時、私は出張で東京に居り、葬儀に参列することができなかったが、帰つて来た私に、彼は葬儀の模様を、詳しく知らせてくれた。その中に、「奥さんがえろう泣きよつてなあ。」という言葉があったが、その言葉を、彼は眼に涙を浮かべて私に語つたのである。

平成十六年の十二月、家内が他界した。その時、多くの方々からさまざまな追悼のお言葉をいただいたが、その中で、福永さんのとつた行動は、私が今までにまったく経験したことのないものであった。彼は、手紙も添えず、電話で連絡することもなく、ただ彼の住む彦根で栽培されているいちごを送ってくれたのであ

る。それも、少し時を置いて、二回に及んだ。

追悼の心を表わすものとして、言葉は必ずしも十全の道具ではない。万感胸に迫って、言葉を失うこともあるうし、追悼の言葉そのものが、かえって相手をいつそう悲しませることになるのは、しばしば経験するところである。彼は私を悲しませないために、すべての言葉を心中深くに収め、ただいちごを送ることによって、その思いのすべてを、そこに託そうとしたのではなかったか。私は彼の行動をこのように解したのである。

福永さんは、平素大変に朗らかで、人を笑わせることが多かった。これが、福永さんに対する、多くの人々の第一印象であろう。しかし、その反面、彼は他人の悲しみを自身の悲しみとして受けとめ、また、他人の悲しみを和らげることに心を用いた。彼は僧であったが、こういう僧を名僧と呼んでいいのではないかということ、私は今にしてつくづくと考えているのである。

優秀論文発表会に参加して

大國三回生 清水美里

私は学会委員だったこともあって、一回生のときからずっとこの発表会に参加しています。一回生のときは入学してから間もなかったもので、先輩たちの発表や卒業論文の執筆作業について聴い

ていてもイメージがつかめず、ただただすごいなと感心しているだけでした。二回生のときは、ゼミ決めがあるということもあり、一回生のときよりは身近に感じましたが、それでもやはりどこか現実味のないものでした。しかし、三回生になった私にとつて、今年の優秀論文発表会は先輩がたの偉大さを痛感するものでした。

三回生ではゼミが始まり、レジュメを作成して発表する機会が増えました。資料を探し、見つけ出した資料を読み込み、考察をし、その資料を上手く使って自分の考えを論理的なものにして、さらに他の人にわかりやすいレジュメ構成にしていかなければなりません。私にとつては発表用のB4判のレジュメを数枚作成するだけでも大仕事です。なので、先輩方が素晴らしい卒業論文を書きあげ、配布用にわかりやすくレジュメまで作成しているというのがどれだけすごいことなのか、本当によくわかりました。

また、今まで優秀論文発表会で先輩方の発表を聞いていて気付いたことは、どの先輩も先行研究を鵜呑みにすることなく、多くの資料を見てその妥当性を確かめ、自分の考えを展開しているということです。例えば今年発表してくださった堀邊先輩は、先行研究の根拠を確認するために雅楽についても深く調べていらっしやいました。論文や先行研究、辞書なども鵜呑みにせず疑問を

もって読むようにとは入学してからどの先生にもずつと言われてきました。が、どうしても辞書や注釈書に書いてあることは信じてしまい、私はなかなか疑問をもって読むことができません。しかしこの発表会で発表して下さった先輩方は、この疑問の視点をもって資料を読まれました。先輩方の論文が素晴らしいのは、多くの資料を読み、その資料に対し常に疑いの目をもって接するという基本的なことがしっかりとできているからなのだと感じました。

優秀論文発表会に参加して、自分は卒業論文を書き上げることができののだろうか、就職活動と並行しながら卒業論文を書くことができるのだろうかなど、焦りや不安も感じましたが、それよりも今自分に出来ることをしっかりとやっていくことが大切なのだと思いました。ゼミでの発表であったり、授業に対する姿勢であったり、結局は日々の積み重ねが大きな成果となって自分にかえってくるのだと思いました。

優秀論文発表会に参加して

大國四回生 中 村 祥 子

最初に発表して下さいた堀邊絵梨子先輩の発表では、『栄花物語』のある箇所における解釈が注釈書によって異なっていること

に着目し、その問題の部分の本文をどのように解釈するのがよいかを検証していくというものでした。本文中で使われている言葉、例えば「いかに」や「もの」と何と…」などに着目し、それらの言葉がどのような意味で使われているのか、どのようなニュアンスで用いられているのかを、他に使われている用例を集めて検討されました。また、問題の本文に書かれている「もの」と何と…」が当時の世の中でどのような種類の唱歌として捉えられていたかを検討することで、正しい解釈を結論付ける根拠とされています。

この発表を聞いて、最初に出てきた〈解釈の揺れ〉という問題から、正しい解釈を決定するまでの論証の過程がとても整然としていて、聞いている側の私にはとても清々しく感じられました。問題を解決するためにどの語に着目し、どの資料と比較をし、その結果どのような結果が得られたかという、問題提起から結論までの思考回路が明確で、私たち後輩でもとても理解しやすかったです。

次の定松良子先輩の発表は、「泣いた赤おに」を論じた先行論文の中に不備を発見するところから出発し、「哀れさから善意を育む」という先行研究の流れに沿いつつも「泣いた赤おに」という作品においてはその点がどのように反映されているのかをより

深く掘り下げて考察する、というものでした。そのために「泣いた赤おに」の原題版・改題版・最終版を相互比較し、それを作者の童話観に基づいて検討する、というものでした。

私自身も近代文学で卒論を書くことを志しているため、発表が聞けるのを非常に楽しみにしていました。先行研究を整理し、そこに何が欠けているか、どこまで正しいといえるのかを自分の頭でしっかり考えて見極めることの大切さを実感しました。

次の山口望先輩の発表は、論文の内容説明に加え、これから卒論に取り組む私たち後輩のために、コーパスというものがどういうものなのか、またその使い方など、卒論執筆のために役に立つ知識を伝授してくださいるものでした。

私の知らない知識であり、比較的新しい手法であるということだったので、とても興味深く発表を聞くことができました。

最後の山中亜紗子先輩の発表は、十五夜があるのに十三夜が詩歌の素材として存在することの意味を考察するもので、和歌や漢詩文から例を集めて比較検討されています。

どのように考えてそのような結論に至ったのかが明確で、とても分かりやすく、楽しく聞くことができました。

先輩方が説明くださった御論文の内容はとても整然としていて、先輩方は、論点と論証の過程を私たち後輩にも分かるよう

話してくださいました。先輩方の発表で、論文での論証のしかたや、その際の思考の過程を見せていただきました。ひとつひとつの事柄を順番に、丁寧に積み重ねていくことで卒業論文という大きなものになっていくのだな、と感じました。今年卒業論文に取り組む私たち四回生にとって、非常に貴重な時間となりました。ありがとうございました。

私を感じたもの

大国一回生 井上 真理子

私は、割と小さな頃から、お能のお話を父から聞かされていた。父方の曾祖父が、お能のお話をしていた、ということもある。また私も、能ではないが、芸能の一つに携わってきた。そのほか、伝統芸能と呼ばれるものには、大変興味を持っており、今回の能楽鑑賞会も、とても楽しみにしていた。

生で見たのは、これが三度目である。以前見た記憶がはっきりしていない為、今回のお能は、私にも新鮮であった。プロの方のお話をはじめ、今回見せて頂いたどれもが印象深く残っている。そのお話を聞くことで、能の世界が広がり、普通に見るよりもめり込んで見ることができた。着付け後のお能「松風」を舞われた時であっただろうか。それまでの舞台上の雰囲気、張りつめ

たように感じた。笛、小鼓、大鼓の方々が奏でるものと、舞手、お謡の方々の低い声が、私の耳に心地良く響いてきた。それは、「橋弁慶」でも同じであった。話が進むにつれ、こちらの客席側にも、その、びんと張った空気が伝わってきていた。誰一人、話す人もなく、私も私の周りも、舞に見入っていたように思う。舞台では、舞手の方が舞われており、その動きはなめらかで、その上、勢いもあつた。静があり、動があり、それらが互いに入りまじり、泣きたくなるほどきれいな舞だった。私は、ふと、自分のしていた民舞を思い出していた。舞い方、足さばきが違えば、音楽や全体の雰囲気も違う。似ているのは、静と動があることと、舞う時の緊張した空気。もちろん、玄人と素人では比べものにならないのだが、少しでも、似ている所を見つけられたことを嬉しく思った。自分が十五年やってきたことは、無駄ではない。もしかすると、能は、私がしてきたものの延長線上にあるのかもしれない。そんな風に考えてしまうほど、私を違う世界に連れて行ってくれるものであつた。

今回、能楽鑑賞会に参加し、お能に対する興味が、さらに湧いた。機会を見つけて、今度は自分の足で、見に行ってみようと考えている。国文で学ぶ私達にとって、伝統芸能に直接触れることが出来るということは、大切なことではないだろうか。そういつ

たものに触れる度に、私達の幅が広がり、視界も広がっていくのだと、私は考える。能に直接触れるという機会に恵まれた私達は、本当に幸せ者だ、と実感した一日だった。この気持ち、私の拙い表現でしか表せないことがとても残念である。貴重な時間に巡り会えたことに感謝し、さらに学ぶことに励んでいきたいと思う。有り難うございました。

能楽鑑賞会についての感想

大國一回生 西村郁美

今回、能楽を鑑賞させて頂き、一生に何度見るかわからない貴重な体験をすることができ、ありがたく思います。能楽師の皆さんの能や着付け、囃子についての丁寧な説明を受け、能に対する知識が増え、とても嬉しく思います。

最初に、河村晴久さんのお話がありました。能とは、観阿弥・世阿弥父子が室町時代に大成したもので、特に世阿弥は室町幕府三代将軍足利義満に気に入られ、能を発展させていった、など能の歴史を詳しいところまで知ることができました。そして、河村さんは感情の表現の仕方、男性、女性、侍、鬼の立ち方や歩き方を実演してくださいました。河村さんの動きは静かにかつしなやかで、能の幽玄さを感じました。能では動作も感情も、一つ一つ

少しの違いをつけて観客に理解させなければならぬということろは能楽師の技術の高さを感じ、深く感動しました。

次に、着付けを見させて頂きました。ここではジョークを交え、かつ丁寧な説明を楽しく聞かせて頂きました。能の着付けはめつたに見ることができないものであると聞いていたので、とても興味深かったです。着付けは三人がかりでされるということを初めて知りました。そして、外に見えている着物はもちろん綺麗なのですが、中に着ている着物も綺麗だということも、実際に着付けを見てわかったことでした。私は、着付けされている人はじつとしていなければならず、絶対に疲れるだろうと想像していましたが、着付けをしている方も、とても疲れるだろうと見ていて思いました。そして、女性の髪形を作るところも見ることができました。とても細かい作業で、不器用な私にはとても無理だと思いがら見ていましたが、やはり能楽師の皆さんはとても綺麗に仕上げている、すごいと思うばかりでした。

次に、囃子のお話を聞かせて頂きました。笛の中に竹筒が入っていたり、小鼓や大鼓の胴の部分は桜の木が使われているなどと楽器のしくみについて詳しく話してくださいました。どの楽器の音も驚いてしまうほど、迫力がありました。

最後に、橋弁慶の半能を見させて頂きました。半能を見る前に、

河村さんが説明してくださったこともあって、話はとてもわかりやすく、面白かったです。牛若丸役の子方、武蔵坊弁慶役のシテ、両方共迫力のある動き、声で、その上囃子の三人の演奏が大迫力で圧倒されました。

能楽師とは、厳しい環境にいて、クールな方が多いのではと勝手なイメージを持っていましたが、そうでもなくて、面白く親しみやすそうな感じの方々でした。しかし、先程までにこやかにお話しされていたかと思いきや、お芝居、演奏を始める時に急に顔が変わり、もうこの方達は能の世界に入っているのだと思い、その切り替えの速さに能楽師のプロ意識を感じると共に、尊敬の念を抱きました。今回、能を深く知ることができ、本当に楽しませて頂きました。

二〇二一年度 論文題目

修士論文

『源氏物語』における惟光の働き

窪添綾香

—従者を介した恋のはじまり—

姑に認められない女君

黒川のどか

—『落窪物語』における道頼母の役割—

高木理恵

『蜻蛉日記』下巻の「たはぶれ」考

—広幡中川転居後の記事を中心に—

『とりかへばや物語』における吉野

田中祐子

—転生と救済の土地—

寺坂泉

『御堂関白記』にみる物忌行動

—忌みの軽重による対応の差—

六条御息所に関する作中表現のもたらす影響

端口智美

—葵・賢木巻における描写を中心に—

「霜の後の夢」論

深野智奈美

—須磨巻・冬の場面と『敦煌變文』の関わりについて—

『栄花物語』月の宴巻

村上天皇と按察の御息所の対話場面卑見

堀邊絵梨子

—保子内親王への琴の教授をめぐる—

物語において「姫」呼称が与える印象

真柴史江

—「入内」をほめめかす「姫」呼称—

花散(里)に含まれた養母性

吉川亜衣梨

卒業論文

古 代

日本人の「鬼」の概念について

井伊周子

—上代・中古の文学作品を中心に—

「風をだに恋ふるはともし」の解釈

井口真菜

—鏡王女の『萬葉集』所載歌—

「うちとく」によつて書き分けられた源氏物語

—光源氏をとりまく世界の区別の法則—

宮崎 千賀子

御伽草子「玉水物語」考

狐に関連する狂言—中世の人々と狐

澤田 香織
伊藤 晴花

中 世

『安宅』における勧進帳—「最愛の夫人」の正体—

米島 彩奈

『わらんべ草』に見る大蔵虎明の知識

岩下 歩美

異界の東岸居士

鈴木 千賀

夫婦狂言における笑いの要素

川原林 怜

『今昔物語集』巻二十七における標題の研究

上野 恵理

大神神社信仰から見る謡曲〈三輪〉

北村 有里江

酒天童子の出自および生誕地が異なる謎

北浦 由希

狂言にみる中世の働く女性

田岡 真季

—『大江山絵詞』と御伽文庫本『酒吞童子』、ほか関連の作品をめぐって—

狂言の普遍性

高木 かおる

『日本霊異記』中巻第八縁と第十二縁の考察

近藤 歩

狂言と呪文の関わり

中瀬 梓

『酒吞童子』の鬼子たち—彼らの命運をわけたもの—

菅原 あゆみ

中世の人々と福神信仰—狂言「福の神」を中心に—

村田 珠代

渋川版御伽草子『小敦盛』の新たな意義

東村 香奈

能狂言における『和漢朗詠集』の受容

山田 智重

—絵巻との比較から—

近 世

小夜中山「夜泣石」伝説論—伝説の普及について—

名倉 彩乃

蟹満寺縁起の考察

原 麻奈美

『堀川波鼓』論—近松の脚色—

伊佐田 祐未

—『法華験記』と『今昔物語集』との比較—

『日本永代蔵』論

今井 富美子

『今昔物語集』における蛇への転生譚

福田 紘子

—巻六ノ五章題、「智恵をはかる八十八の升搔について」—

—牛への転生譚と比較して—

『諸国百物語』巻之二ノ十二

植苗 香織

『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の比較検討

松田 千佳

「遠国の国の堀越と云ふ人婦に執心せし事」考

植苗 香織

—安倍晴明を中心に—

—蛇に変身する男—

萱草と紫苑に関する説話の研究

村山 薫

「吉備津の釜」考—秋成の文章の工夫と表現—

金野 未希

『江戸生艶気権焼』論

亀山奈那

— 艶二郎の人物像と色男像から見る作品の面白さ —

— 卷二「情を入し樽屋物語」おせんの人物像について —

『風流邯鄲浮世榮花枕』考 — 吟雪の工夫を中心に —

河井良実

『かくれ里ふく神よめいり』考
— 嫁入物としての位置付け —

山西由佳

『心中二枚絵草紙』考 — 『用明天皇職人鑑』の利用 —

川勝智江

『本朝櫻陰比事』卷一の八「形見の作り小袖」考
— その創作意図 —

山本真里奈

『人間一生胸算用』論 — 山東京伝の工夫 —

北山祐巳子

『春色梅児誉美』論 — 女たちの意地について —

久保摩佑子

「不忠義のあし音」考

吉田早織

『化物一代記』における作者の工夫
— 演劇の取り込みを中心に —

河野友美

— 『西鶴諸国ばなし』卷一の五における工夫 —

吉田早織

『醒睡笑』の面白さ — 武士が登場する話を中心に —

佐々貴のりこ

『本朝二十不孝』卷一の三「跡の剥けたる嫁入長持」論

四田明美

『世間胸算用』卷三ノ三「小判は寝姿の夢」考
— 主題と西鶴の工夫 —

高田那菜

近松『心中天の網島』と大幸『おさん』の比較
— 「女房の懐には鬼が住むか、蛇が住むか」の表現を中心に —

米田友美

『男色大鑑』卷二の二「傘持つてもぬるる身」論
— 「衆道」の描かれ方の特徴 —

田中沙織

『雨月物語』「青頭巾」論 — 鬼僧という人物について —

伊藤愛都

『心中天の網島』考 — 「女同士の義理」の特異性 —

廣部恵子

『武家義理物語』卷四の四「丸綿かづきて偽りの世渡り」論
— 「偽り」と「まこと」とは —

石澤真悠子

『薩摩歌』論 — おまんとお蘭について —

藤田恵

黄表紙『名代千菓子山殿』考
— 当時のお菓子やお芝居の取り入れ方について —

上村栄美子

『菊花の約』考 — 信義について —

藤本奈津子

豊竹座浄瑠璃『道成寺現在蛇鱗』における女性像
— 清姫と錦の前について —

岡本理恵

『夏祭浪花鑑』考 — お辰の「女房作」について —

森さや香

『仁勢物語』における男女の話について

小川絢香

『好色二代男』卷一の二「誓紙は異見のたね」考
— 遊女のまこと —

安田芽依美

『日本振袖始』論 — 人物設定における近松の工夫 —

亀井茉衣

『好色五人女』考

山下きくか

『日本振袖始』論 — 人物設定における近松の工夫 —

亀井茉衣

『雨月物語』『夢窓の鯉魚』論

黒田 諒

鏡花作品の中で生きる〈画家〉たち

伊丹 咲穂

―「自由」と道行文のかかわり―

―「外科室」を中心に―

『冥途の飛脚』考―八右衛門の人物像について―

原 千恵実

『鐘声夜半録』の女性たち―鏡花が描いた定子と幸―

瀧上 亜寿紗

『心中天の網島』考

森岡 由夏

中島敦「文字禍」考

土井 恵子

―近松によるこたつの演出効果について―

「たけくらべ」における〈紅の絹はんかち〉の意味

中田 知絵

嫁入絵本『大島台猫の嫁入』の意義について

吉田 絢香

『駆込み訴へ』論―大宰の描いた〈ユダ〉―

西村 美希

近代

近 代

「よだかの星」論―星になるということ―

加波 幸子

永井荷風「花籠」に込められた意味

三島 諒子

中島敦「山月記」について

尾関 祐子

『あめりか物語』と荷風の恋

岩井田 優子

人が虎に変わる理由―中島敦「山月記」―

佐藤 未沙

『新撰組血風録』からみる司馬史観

山本 美月

「春日狂想」における中也の宗教観

澤田 遥

漢文

「待つ」にみる太宰治の姿勢

新熊 優季

『雨月物語』『蛇性の姪』論―真女子像を中心に―海邊 有紀子

樋口一葉の描く「狂気」について

隅田 有希

『平家物語』小督条に見られる漢詩文及び『源氏物語』の影響

尾田 沙祐里

志賀直哉「或る朝」における主人公と祖母の関係について

西尾 佳奈枝

平安時代の舞姫像

川高 理緒

「こんぎつね」における「こん」と兵十

阪野 由佳梨

―『和漢朗詠集』・『新撰朗詠集』「妓女」の項を中心に―

島田 美紀

村山樗多にとつての紫色

山口 順子

『源氏物語』紅葉賀巻の試楽の場面について

清水 絵理

「泣いた赤おに」における廣介童話の善意

定松 良子

―「袖振る」の典拠―

「高野聖」論―女の魅惑と明治文学に与えた衝撃―

小新 千恵子

古代文学作品における音楽の考察

清水 絵理

—『宇津保物語』・『源氏物語』を中心に—

御伽草子『二十四孝』考

城崎温泉寺縁起の研究

「春秋競麟歌」について—後世に与えた影響について—

国語学

形容詞「わづらはし」と動詞「わづらふ」

大正・昭和期の児童文学の文体

—雑誌『赤い鳥』の文末表現を中心に—

『ファミリアフェア』の「僕」と渡辺、『ノルウェの森』の「僕」

と緑のかかわり方の分析—ボライトネスの観点から—

万葉集にみる古代の時間意識

夏目漱石『道草』の自筆原稿による振り仮名の研究

—振り漢字の用例をもとに—

『万葉集』二〇番歌における「之」の訓について

擬音語・擬態語から見た怪奇作品の表現について

三島由紀夫『金閣寺』における一字漢字

呼びかけの歌の変遷

作品中の書簡文と実際の書簡文との語彙論的比較

原稿『坊っちゃん』を読む

若者雑誌の表記

—カタカナ表記語とローマ字表記語を中心に—

介護福祉士の国家試験の出題漢字

万葉仮名の分布に関する小考

コーパスを用いた類義語の記述的研究

インターネット上で使用される笑いの文法

強意の接頭辞の意味用法

—室町時代から江戸時代まで—

週刊誌における皇室敬語

—敬語と敬称の関連性について—

発話と応答におけるポーズ

動物の助数詞について

—動物園、水族館、学生へのアンケート調査から—

中学生における「敬語」

—実態と正誤意識の現状調査—

マニユアル敬語

「携帯メール言葉」について

—京都女子大学生へのアンケート結果をもとに—

当て字について—高校生へのアンケートから—

振り仮名について—現代の用途分析を中心に—

三宅 真利江

本 尚子

安井 都

山口 望

山本 静佳

坂尾 由香

高須 円香

八幡 英里

赤木 由美

秋山 瑛美

池田 愛美

上田 紗希

橋本 とも子

船本 真菜

松倉 茜

上野 彩香

宇野 晶子

富山県における魚名の研究

大森 瞳子

—植物・自然風物や江戸時代をめぐって—

用例分析から考える「ういる」の意味と使用法

奥山 夏実

—西讃方言の実態—

松尾 有記

—「Fisher 語「ういる」の現状と今後の展開—

敬語使用に対する意識について

加藤 菜緒

—若年層・老年層へのアンケート調査をもとに—

丸山 仁実

—京都女子大学の学生へのアンケート結果から—

敬語の現状—身近な学生へのアンケート結果から—

門田 友里恵

—ジャンル別の違いを中心に—

山根 舞子

慣用表現の誤用

北埜 沙也加

—山口県の校歌の歌詞について—

山本 麻衣

—京都女子大学生へのアンケート調査をもとに—

和歌山市方言の現状

小浦 享子

—山口県公立小学校、中学校を中心に—

四本 菜豊

—中学生へのアンケートを基に—

性差による文末表現の違い

砂川 智永子

—曖昧表現の動機とその効果を考える—

和田 理香

—現代ドラマの会話分析から—

小学生の敬語力

辻村 有加

—文学作品における比喩表現—

—三年生と六年生へのアンケート調査から—

「暖簾」と上方落語から見る大阪ことば

露口 友香理

おいしさの表現について—分類調査から見る特徴—

永松 沙季子

昔話の中のおノマトペ—地域差を含めて—

夏目 亜季

意味の広がり—「やばい」の使われ方—

平山 みらい

日本語の欧米化—明治と戦後の新聞小説を比較して—

藤野 みゆき

和菓子の名前の由来とその分類について

堀内 祥子

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の電子媒体による公開)

掲載された論文等は、電子媒体によっても公開する。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。
本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・中前正志・田上稔・江富範子・新聞一美・工藤
哲夫・山崎ゆみ・峯村至津子

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会にて結果を報告、審議の結果、四点が掲載となりました（そのうち、注釈と資料紹介が各一点ずつあり、いずれも非常勤講師の先生方からのご投稿でした）。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

（江富・峯村）